



**3.11 から 3 年半**

# **被災地は今…**

**2014 年度被災地復興応援  
ボランティアツアー報告書**

**立正大学社会福祉学部ボランティア活動推進センター**

**被災地復興応援ツアー報告書編集委員会**

### 2014 年度被災地復興応援ボランティアツアーについて

立正大学では東日本大震災後から瓦礫処理、仮設住宅での支援などのボランティアに延べ 220 人が参加してきました。しかし、震災から 3 年半が経ち、被災地でのボランティアのニーズは変化してきています。今求められている支援とは何なのか、首都圏の私達に何ができるのか、それを探るべく、今回、2014 年 9 月 14 日から 3 泊 4 日の日程で、31 名の学生の参加を得て、ボランティア活動の他に被災地の視察や地元の多方面の方々からのお話を聞く機会を取り入れたツアーを実施することとなりました。

## ツアー行程

日にち	訪問地	内 容
9 月 14 日	南三陸町	南三陸町さんさん商店街にて昼食 (p.2)
		津波跡視察 (p.1)
		復興に向けて (株)アストロテック 佐藤秋夫氏 (p.5)
9 月 15 日	南三陸町	菊農家にてボランティア活動 (p.5)
	女川町	女川町、石巻市立大川小学校視察 (p.2~3)
	石巻市	一般社団法人 OPEN JAPAN 訪問 吉村誠司氏 (p.7)
9 月 16 日	石巻市	語り部さんと街歩き (p.4)
		いしのみキッチンにて地元の方と交流 (p.6)
		旧石巻市災害ボランティアセンター訪問 阿部由紀氏 (p.7)
		企業の社会貢献活動について (株)一ノ蔵 山田好恵氏 (p.6)
		振り返りのワークショップ (p.11)

## あの時を忘れない...

宮城県 南三陸町…海山が一体となっており、リアス式海岸特有の豊かな自然環境を形成しています。漁師まちで特にワカメやタコ漁が有名です。3.11 で、多くの命を救った防災無線アナウンスはこの町の防災庁舎から命を懸けて発信されたものでした。

### 南三陸町防災庁舎～最後まで避難呼びかけた～

南三陸町防災対策庁舎は当時からテレビなどで見ていて知っていましたが、実際に現地に行って視察するともすごい衝撃を受けました。津波が壁や周りの物などすべて持って行ってしまい、赤い鉄骨と非常階段だけになっていました。

当時、屋上には 30 人程が避難していましたが、津波は建物の屋上を 2メートルも越えて押し寄せました。階段につかまったり、アンテナによじ登ったりして、わずか 10 人ばかりが助かりました。本庁舎では津波到達まで住民に避難を呼びかけ、呼びかけ続けた女性は犠牲となってしまったそうです。今もお献花台があり多くの人がお参りに来ていました。現在は取り壊しが検討されており、遺族からは残しておいてほしいという声もあれば、見るのがつらいから取り壊してほしいという声もあるそうです。自分としては震災遺構として残し、次世代の人へ受け継いでほしいと思いました。

また、ぎりぎりまで町民の避難を優先し亡くなられた方にご冥福を申し上げるとともに、こういった行動に感動し、自分も周りを助けられるような人になりたいと思いました。



## 女川町～津波跡が残る～

宮城県 女川町…宮城県の東、牡鹿半島基部に位置する女川町は、暖流と寒流が交わり、カキやホタテ・ホヤ・銀鮭などの養殖業が盛んな町です。3・11 を受け、女川町は犠牲者率が最大となる甚大な被害を受けました。

### 江島共済会館

津波の威力で建物の根本から横に倒れて、元の位置から、10～16m 程度移動した状態で残っていました。

復興事業の進展に伴うかさ上げ工事のため、解体が決まっています。



### 感想より抜粋

まだ復興が進んでいない現実や、津波が来た時の話を聞いてとても悲しくなりました。津波の被害がわかる建物が壊されると聞いた時はとても驚きました。僕としては、建物は壊さなくて残しておいてほしいと思いました。

### 旧女川町立病院

旧女川町立病院は海拔 16 メートルの高台にあり、災害時の避難所に指定されていたため、病院職員約 70 人も含めて約 700 人が病院に避難していました。しかし、津波で 1 階が破壊され、4 名が死亡し、医療機器やカルテ、薬品等が流されましたが、医療活動は継続されました。



今回、女川町を訪ねてみて、3 年経った今でも傷痕が至るところに残っていて、津波の凄まじい破壊力を感じた。旧女川町立病院は高台に位置し、津波避難場所に指定されていたが、実際は津波が来て、4 人が亡くなってしまった。このことから、「想定外のことを考える」ことが大切だと思った。女川町の様子を見て、復興までの道のりはまだ険しいと感じた。

## 南三陸さんさん商店街

南三陸さんさん商店街は、2012 年 2 月 25 日に、宮城県南三陸町の志津川地区にオープンした仮設商店街です。復興を担う地元の事業者 32 店舗が出店しており、連日多くの観光客で賑わっています。

また、週末になるとフードコートや特設のステージで様々なイベントが開催されます。

商店街の方々は震災を受けたとは思えないくらい明るく、笑顔がきらきらしていて、逆に元気ももらいました。復興に向けて、前に進もうとする人のパワーはすごいなと思いました。今後もまた訪れたいと思います。



## 石巻市立大川小学校～あの時のまま～

宮城県石巻市にある大川小学校は河口から約5kmの所にある小学校です。テレビで何度か見たことがあるので、ある程度イメージがついていたつもりでしたが、現場に行ってみると、私たちの想像を遥かに超えている光景を目にしました。原形を留めていない体育館や津波によって壁や天井が破壊された教室が今もそのまま残っていました。全生徒の7割にあたる74人、教職員10名が死亡、行方不明になりました。この死亡・行方不明者の数はもっと減らせたかもしれないと言われています。しかし、当時の状況はわからないままです。



大川小学校は2011年3月11日に被災した姿のままで、当時の空気や児童の声などが聞こえてくるような感覚に思わず言葉を失い、涙が止まりませんでした。それほどこの大川小学校はメッセージ性の強い建物でした。生で見ないとその現場の被災状況や復興状況が分からないことを学びました。

### 感想より抜粋

特に印象に残ったのは、大川小学校でした。ここでは、私はどうしてもシャッターを切ることができませんでした。児童74名、教職員10名が亡くなってしまったという事実が小学校の姿を通して突きつけられ、胸が痛くなり、涙が止まらなかったからです。

テレビで何度も被災地の映像を見たり聞いたりしていたけれど、実際の被災地は映像や言葉では語り切れないものがたくさんありました。

特に印象に残っている場所は大川小学校で、バスを降りて見た時は衝撃的すぎて、言葉に表すことができなかったです。

コンクリートの太い柱が崩れて倒れ、ここが小学校だったなんて想像もできなかったし、何よりもこの場所で、多くの子ども達が亡くなったと思うと、涙が止まりませんでした。

大川小学校の現在は、校舎の原型がわからないほどであり、まるでここで戦争があったのではないかと思うほど衝撃的だった。大川小学校は湾奥部の北上川河口から約4キロもあり、ここまで津波が来たということが信じられなかった。恐らく大川小学校の人もここまで津波は来ないだろうと判断をしたのだろう。一瞬の判断が生死を決定づけるということをまざまざと見せつけられた気がした。

小学校は津波が起こったときのままだった。校舎や体育館はほとんど原形をとどめていなくて、津波の恐ろしさを痛感した。亡くなった人の名前が書いてある碑には、老若男女問わずたくさん名前があった。みんなもつと生きてかっただろう、自分もしっかり生きなければと思った。

## 語り継ぎたい～語り部さんと歩く～

私たちは語り部をされている高須賀さん、萬代さんと震災当日逃げた場所や当時の様子を聞きながら石巻の町を歩きました。高須賀さんは地震の直後、車を走らせているところを後ろからきた津波にのみこまれ、60mほど流されましたが、運よく窓が開き、車から脱出し木の枝につかまり一命をとりとめたそうです。翌朝、瓦礫を乗り越え、2.5キロの距離を8時間かけて自宅に帰ったそうです。

その後は自宅が避難所のようになり、炊き出しなどを行っていたそうです。食材は流れてきた冷蔵庫の物を使っていたそうです。近くの避難所では4人家族に500mlの水とあめ3個という状況で、しかも避難者が優先で、自宅にいる人はもらえないというご苦労もされたそうです。

地震発生時、車の中や歩いていた人、家にいた人、避難したけれど津波に巻き込まれてしまった人、また11日は雪も降りとても寒く低体温で亡くなった人、いろいろな方がいました。その方々が最後どのように死を覚悟して死んでいったのか、その人たちの気持ちを考えてほしいとおっしゃっていました。

萬代さんは自分が津波に襲われながらも、車が流されてきたので2名の方を助けたそうですが、その方が女性が男性か覚えていなく、記憶がないとの事でした。雪をみるとトラウマになってしまう、一生かかえていかなければいけない問題だともおっしゃっていました。

お二人のお話を聞いて、津波の高さや震災直後の大雪、食糧や水の不足は想像をはるかに超えていました。当時の悲惨な状況を思い出すのも辛いのに「皆さんに伝えることも仕事」と言って、涙を流しながらお話して下さったのが印象的でした。また膝から上の流れでは流されてしまうので杖を持つといい事や、避難生活での工夫、防災に関する知識などもたくさん教えてもらいました。

最後に私たちへのメッセージとして、勉強は生きていくために必要で、いつか役に立つ時がくるから沢山知識を入れて経験をして、やれるうちに何でもやって欲しいとおっしゃっていました。語り部さんのお話を聞いて、いかに命が大切か、いつでも災害への認識、意識、知識を持つことが大切であることを再確認しました。



300人が避難した小さな神社



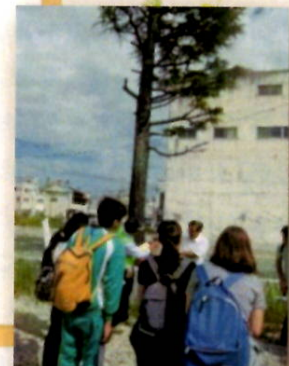
多くの人が避難した日和山

## 感想より抜粋

石巻の語り部さんの話では津波がきた時の状況や実際にどうやって避難したかも話してくれて思わず聞いて泣きそうになってしまいました。

かなり急な上り坂をバックギアでかけ上がったと聞いた時、生きるのに必死だったんだなというのが分かりました。

こういった自分が体験したり見たこと聞いたことは、自分達の教訓にすると同時に後世にも伝えていかなければいけないなと思っています。



この木の枝につかまり、助かりました

## 復興に向けて

### (株)アストロテック 佐藤秋夫さん

私たちは、宮城県南三陸町で本革バッグを製造する株式会社アストロテックの社長、佐藤秋夫さんにお話を伺いました。

震災以前、アストロテックは電子部品を製造する会社でしたが、地震で工場が被災し、全ての機器が使えなくなってしまいました。しかし、佐藤さんは友人から工場を借り、地震翌月の4月3日には稼働し始めました。その早さの理由として、「とにかく従業員を守らなければならない。」「前へ進むしかない。」と率直に感じたからだそうです。被害を受けた誰もが前へ進むしかない、何か起こさなければ、と一度は考えたと思います。佐藤さんはその先頭に立って、工場を再開させました。その決心は被災された方たちに元気を与え、同時に復興への光になったと思います。

震災後、南三陸を支援する団体「LOOM NIPPON」から、南三陸の新たな産業復興のためバッグを作ってみないかという話がありました。以前から佐藤さんは第一次、二次産業だけでは限られており、若者をひきつけるために別のものがあればと考えていたので、バッグの製造に挑戦してみることにしたそうです。現在では皇后陛下も購入され、商品は3ヶ月待ちだそうです。

復興とはただ震災前に戻すのではなく、進化した復興をしなければならないと語る佐藤さん。南三陸をファッションであるバッグの一大拠点とし、若い人に南三陸で働いてほしい、南三陸を盛り上げたい等、ふるさと南三陸に対する強い思いを感じました。



佐藤さんは最後に、「震災で命を授かった。たくさんのご支援をいただいて生かされているからには頑張ってお返ししたい。」とおっしゃっていました。私たちは佐藤さんから多くの人に支えられて生かされていることに感謝し、負けることなくまず一歩を踏み出す勇気を頂いたように思います。



### 菊農家でボランティア

南三陸町で被災された菊農家のお手伝いをさせていただきました。お手伝いをする前に経営者である及川博喜さんに当時の状況を聞きました。津波によりビニールハウスは流され、畑の殆どが海水に浸かってしまったそうです。菊を栽培するにあたり、海水が畑の土に悪影響を及ぼすため、土全体を入れ替えなければならない作業が一番苦労をしたそうです。まだ以前の3分の1程の収穫量しかないとのことでした。この菊農家の作業をさせてもらった私たちは、津波にあった辛さと復興へと進んでいく頑張りを心と体で学ぶことができました。私たちがお手伝いしたのは菊の収穫後の片付けと簡単な作業ではありましたが、時間と体力が必要なものでした。近くには津波の影響で傾いた電柱や曲がったままのガードレールなど、まだ津波の爪痕が残されたままです。私たちがこのボランティアを通して伝えたいことは、3年経った現在でも復興は完全ではなく、震災によって受けた傷と向き合っている人たちがたくさんいるということです。短い時間でのボランティア活動ではありましたが、震災の体験を聞いたことは貴重なことでもあり伝えていかなければならないことだと思いました。



## いしのみキッチン

ボランティアから始まった『ぐるぐる応援団』のプロジェクトの一つとして、2012年4月に、石巻市役所1階にいしのみキッチンはオープンしました。震災によって被災した石巻の主婦や女性、高齢者など再就職が困難な人々の働きの場の提供と失われてしまったコミュニティの復活を目的としています。店内は子どもたちの考えたキャラクターと手作りの温かみのある看板などであふれていました。

食を通して人と人のつながりをもたらしたい、私たちもそんないしのみキッチンによって石巻の方々とつながることができました。今回は石巻の名物『石巻焼きそば』を仮設住宅にお住まいの石巻焼きそばマイスターの方々に教えてもらいました。



## いしのみ★キッチン



仮設住宅から、石巻のお父さん、お母さん方が来てくださり、今回の企画は実現した。僕の班を担当してくれた同じ年のみずほさんは、私より大人っぽく見えた。被災当時彼女は何日も飲まず食わずが続いたと聞かされ、とても驚いた。今の明るい笑顔が嘘のように感じられた。被災の状況を彼女から直接聞くことは私にはできなかった。思い出したくない過去に間違いはないだろうし、彼女を悲しませたくはなかった。みずほさんは子どもたちの面倒を見ていたことや、高校生、大学生が主体的にボランティア活動を行っていることを話してくれた。そこから学ぶことは数多くあり、見習っていかなければならない。

また、とても優しいお母さん、美織さんからは「命を大切に」という言葉を頂いた。震災を無事乗り越え、復興に向けみんなが取り組む中、挫折や苦勞、悲しみから自らの命を絶ってしまう人も知っている美織さんならではの優しさと、思いやりの詰まった言葉であった。神様に生かして頂いたという命の重みというものを、彼女たちは誰よりも感じ、震災から学び、より大きな一歩を踏み出している。震災からそのように復興することに、私は素晴らしさを感じると同時に、未だ、復興に向けて加速できない私の地元福島に対し、私は何ができるだろうかと考えた。私たちが、彼女たちから学んだことは、力強く生きる強さと、みんなを励ます優しさを持つこと、自立すること。そしてまず、自分から行動することであった。

## (株)一ノ蔵の社会貢献活動～お酒で子どもたちを救おう～

(株)一ノ蔵の山田好恵さんに企業の社会貢献活動について伺いました。一ノ蔵は宮城県大崎市にある酒造メーカーです。工場は海から離れていたものの、震災により建物や商品に大きな被害があったそうです。たくさんの支援を受けながら何とか再開できるようになり、その感謝の意を示すため、さらに地域社会への貢献のため、『一ノ蔵特別純米生原酒3・11未来へつなぐバトン』を販売しました。このお酒の売上は全額、被災地の子どもたちを支援する『はたち基金』に20年間寄付していくそうです。『はたち基金』とは震災時に0歳だった赤ちゃんが20歳(ハタチ)になるまでサポートを継続的に行うため立ち上がった基金です。震災から3年半が経ち、風化が進んでいくからこそ継続することに意味があるとおっしゃる山田さん。

一ノ蔵の社会貢献活動、山田さんの仕事を通して社会貢献をしていく生き方、様々な社会貢献の形があるということ学びました。



## ボランティアのち・か・ら



### ●●●石巻市災害ボランティアセンター●●●

石巻市災害ボランティアセンター（以下災害VC）でボランティアの指揮を執っていた阿部由紀さんにお話を伺いました。石巻市社会福祉協議会（以下石巻社協）では震災4日後の3月15日に市内の石巻専修大学に災害VCを設置し、ニーズの把握や全国からのボランティアのマッチング等を行いました。多いときには1日約1000人もボランティアが駆け付け、25年3月までに約12万人のボランティアを受け入れました。専修大学のキャンパスにはボランティアのテントがたくさん張られていたそうです。

当時、特に力を入れていたのは、ボランティア団体であるNPO・NGOのリーダーとの連絡会議で、そこで情報交換や相互の連携について話し合いを毎晩行っていたそうです。社協は公平性を保たなければならないが、NPOやNGOは1か所に集中でき、フットワークも軽く、社協ができないことを補い、支援をすることができるそうです。またボランティアはリーダーがいなくてちゃんと機能しないので、その部分に力を入れていたそうです。

講演の中で阿部さんは「非常時は常時の鏡」であることを強調されていました。実際に被災したからこそ強く訴えたいのだと感じました。石巻社協では災害に備え、震災の5年前から津波の講演会を開催し、3年前から災害VCを石巻専修大学に設置する準備を行っていました。石巻社協の災害に対する備え、意識が高かったことが伺えます。また阿部さん自身も常に災害を意識して行動されているそうです。

文部科学省の公式見解で「南関東でM7クラスの地震が発生する確率は30年以内に70%」と発表されています。何かあってからでは遅いので、できる対策は今から始めなければならないと思いました。



ボランティアに来た人達のテント

### ●●●OPEN・JAPAN●●●



阪神淡路大震災や東日本大震災で支援活動をしている『OPEN JAPAN』の顧問を務めている吉村誠司さん（通称助さん）のお話を聞きました。震災直後の救援活動の様子、被災地の今やボランティアに行くときの準備、心構え、防災について等、実際の事例を交えながら多くのお話を聞くことができました。

助さんは震災の翌日早朝には東北入りをして救援活動を行ったそうです。阪神淡路大震災から共に活動している仲間が全国から集まり、重機やカヌーを使っただけの救援活動、炊き出し、ニーズを把握するためのローラー作戦等を行ったそうです。そして現在はカーシェアリング、津波被害にあった古民家を再生しコミュニティスペースにするプロジェクト等、沢山の活動をされている事に驚きの一言でした。印象に残っているお話しのひとつは、何か一つ特技や、これならできるということがあれば、被災者の助けになるということです。助さんは阪神淡路大震災の時に被災者の話を聞くだけでも助かると言われ、このことに気付いたそうです。また、ボランティアに行くなら自分の身の回りや安全を確保できるように準備を行い、万全の態勢でボランティアに行く必要があるということも教わりました。助さんは震災のこと、想定外を想定すること、これから準備しておくべきことなどを伝えていくのも自分達の役目だとおっしゃっていました。

#### 感想より抜粋

助さんは生き方や考え方自体がとても大きく、私もあの様な人になりたいと思いました。またボランティアをすることの意味や必要なことなど、たくさん大切なことを教えてもらった気がします。



# 災害への備え

被災された方は災害に対する備えをするよう強く訴えられていました。  
 私たちは被災地から学んだことを伝え、活かしていかなければなりません。

## ハード面

### 防波堤、防潮堤を高くする

20mを越す津波が南三陸町を襲いました。津波は防波堤の高さを軽く乗り越え、町を飲み込みました。現在、策の一環として防波堤の高さを上げるなどの対策を新しく取り入れています。しかし、砂浜が無くなる、環境への影響など懸念する声もあります。



## ソフト面

- ・避難訓練をする
- ・避難場所、避難経路の確認
- ・家族との取り決め事項を話し合っておく
- ・近所付き合いをしておく
- ・通信手段（基地局を決める等）の確認

## 普段からの備え

ちょっとした備えが災害時には大きく役立ちます

### 【防災袋編】 これもあるといい！



- ・ヘッドライト  
両手が使えるので便利



- ・大判ハンカチ  
マスク、止血等に使用



- ・ビニールゴミ袋（黒）  
雨具、防寒、目隠し等



- ・新聞紙  
器、防寒、そえ木等

### 【外出編】 普段から持ち歩きましょう



- ・ホイッスル  
助けを呼ぶため



- ・携帯用懐中電灯  
停電、夜間には必需品



- ・水  
飲料としてはもちろん  
ケガ、コンタクトの洗浄等にも

## 災害時の知恵

- ・道路に水が溜まっていたら棒を持って下を探って歩く
- ・濡れた服はすぐに脱ぐ（低体温症防止）
- ・下水の穴にバケツをはめてトイレにする
- ・トイレが無い時、女性はスカートが便利

### 食料編

- ・お米が少ない時はリゾットにすると量が増える
- ・水が少ない時はパエリアにする（少量の水で作れる）
- ・おにぎりの海苔は佃煮にするとおかずになる
- ・非常食として干し飯、干し野菜を作っておくとよい



## いざボランティアへ



- ・ウエストポーチ、防水バック
- ・タオル
- ・応急セット
- ・飲み物、食料
- ・ボランティア保険に加入

思うこと・・・

感想より抜粋

私が今回、参加した理由は、大学生活のうちに一度は自分の目で被災地の現状を見てみたいと考えたからです。ツアーの一日目には、宮城県の南三陸さんさん商店街を見学しました。商店街は仮設で出来ていましたが、震災を受けたとは思えないくらい店員さんの方々の笑顔はキラキラしていて、とても驚きました。その後、震災当時、消防職員であった方に、実際に町を回りながら、被災した時のお話をしていただきました。震災から3年経ち、復興に向けて頑張る商店街の方々の笑顔とは裏腹に、町内のがれきは片付けられていたものの、一面平らで閑散とした町を見て、非常にショックを受けました。

二日目には、震災で被害を受けた菊農園の方のお手伝いをしました。震災当時、ビニールハウスの高さを越える程の津波が襲い、大きな被害を受けたそうです。お手伝いの途中、農家の方の「菊が私たちの財産だから」という言葉を聞き、私ができる精一杯のお手伝いをしようと思いました。

三日目には、石巻市を訪れ、語り部の方の津波から奇跡的に助かったエピソードやメガネは予備を持っておくこと、お米をペットボトルに保存しておくことなど具体的な対策方法などを教えていただきました。特に印象的だったのが、「滅入ってもしょうがない。前に進むだけ。」という言葉でした。

今回ツアーに参加して、被災者の方々やボランティアの方々の話を聞いて、一番感じたことは、前に進もうとする人のパワーはすごいなということです。あの3・11から3年、被災地は復興しつつも、未だに人口減少や防災対策とさまざまな問題を抱えています。徐々に、私たちの記憶から忘れ去られようとしている今こそ、私たちが忘れずに被災地のことを知り、伝えることを復興の第一歩として続けていく必要があると強く感じました。

私自身も今回のボランティアツアーだけではなく、被災地を再び訪ねることや被災地の商品を買うなど、さまざまな形で東北の復興に参加していきたいと思います。



ボランティアツアーを通して学んだことは「想定外を考える」ことである。Open Japanの代表、助さんがおっしゃっていた言葉である。まさにその通りだと感じた。日本は特に自然災害が多い国であり、東日本大震災自体が想定外の震災であった。いつどこで何が起きてもおかしくはなく、常に災害に対する事前の準備が必要であると感じた。

ボランティアツアーに行ってきた自分たちができることは、震災に対して備えること、被災地で見えたことを伝え続けることである。被災地以外のところでは徐々に震災のことを忘れつつある。震災からもう3年ではなく、まだ3年しか経っていないのであって、被災者の方々の心の傷は一生癒えることはない。私たちは現状を人々に伝え続けなければいけないのだ。展示会や本、ホームページでの呼びかけなど出来ることはたくさんある。一つずつやっていきたいと思う。今回このボランティアツアーに参加し、貴重な経験をさせていただいた。それと共に自分の中の震災への風化を止められ、非常に実りあるものになった。機会があればまたボランティアツアーに参加したい。



私が見て聞いて、知ったことは、まだ東日本大震災で起きたことの一部にすぎないかもしれないけれど、ただ生きていだけの人が現地にはいないと思いました。一人一人が、何かに感謝し、犠牲になった方を想いその分まで生きようとし、自分にできる役割を見つけ、日々を生きている印象を受けました。今回学んだ多くのことを無駄にしないように、今からできることを続けていきたいです。

被災地に行って感じたことは、街の復興には長い期間を要するということである。被災地では、瓦礫はほぼ撤去され、元の風景がどっぴりかを忘れてしまうような更地が一面に広がっている状況であった。所々には盛り土がされて、住居の高台移転のための工事が進められている。新しく街を形成するには最低でも7年かかるそうなので、その間にも自分ができることを考えていかなければならない。被災地のために行う活動で、学生にもできることはたくさんある。ボランティアのニーズは変わっていて、現在では農業や漁業のお手伝い、NPO団体が行っている古民家再生プロジェクトなどさまざまである。春先にはわかめ漁が最盛期を迎え、かなりの人手が必要となるそうなので、その時期にぜひお手伝いに伺いたいと考えている。

また、学生ボランティアの役割は、必ずしも作業をすることだけではない。震災後、関西の大学生5人組がボランティアとして雄勝地方を訪れた時、逆に地元の漁師さんにおもてなしをされてしまったということがあったそうだ。地元の方は、彼らに対して、「また来てくれよな」と言葉をかけたという。学生ボランティアとして、現地の方への傾聴、ふれ合い、支え合いというのも支援へとつながるのである。

現地の方はボランティアの私たちに本当に感謝をし、心からのおもてなしをしてくださった。また、交流をする中で逆に勇気づけられてしまったようにも思う。みなさんはとても温かく接してくださり、復興には「人と人のつながり」・「助け合い」が大切だとおっしゃっていた。近所付き合いが希薄になっているといわれる現代において、発災時の備えとして、地区のつながりを意識した人間関係を見つめなおすことが必要である。

また、①風化を止めること(後世に伝える)、②想定は目安にしか過ぎないという意識をもつこと、③訓練の重要性、④災害時の備え(非常食、水、トイレトーパー、メガネ・コンタクトの予備、生理用品、マスク、底が丈夫な靴など)、⑤家族との取り決め(連絡先等)なるべく住んでいる地域から遠い親戚)など、私たちがやらなければならないことは沢山あると学んだ。今後、関東でも大規模な地震が必ず起こると言われている中、私たちは生き残っていく術を身に付けなければならない。

今回のツアーに参加したことで、防災対策に関する自分の意識が大きく変わった。今からできることを進めて、東北地方の方々とのつながり、継続した支援を行ってきたい。また、将来教員になったら、生徒たちに東日本大震災のことを語り継ぎ、しっかりと避難訓練の指導や防災対策について教えていきたいと考える。

## 今、私たちにできること

まとめのワークショップでは、今回のボランティアツアーで見て聞いて感じたことから、今後私達にできることは何かについて話し合いました。実際に現地へ赴いたからこそ出た意見や、被災者の方、ボランティアの方からリアルなお話を聞いて出た意見など、それぞれが感じたことを各班でまとめました。



## 今、私たちにできること



### 行動する

- ・ ボランティア、継続的な支援をする
- ・ 自分達でボランティアツアーを企画する
- ・ NPOを立ち上げる
- ・ 被災地に人が集まるようなイベント開催
- ・ 特技を見つけて活かす
- ・ 被災地の特産品を買う

### 伝える

- ・ 3.11 を風化させない
- ・ 被災地で学んだこと、被災地の良いところを多くの人に広める
- ・ 被災した方の話を本にまとめる
- ・ 防災対策をするよう呼びかける

- ・ 地域のコミュニティを深める
- ・ 多くの人と繋がりを持ち、大切にする
- ・ 子どもから年配の方まで集まれる場所作り
- ・ お互いに助け合う気持ちを忘れない

- ・ 避難経路の確認や非常袋の準備をする
- ・ 常に災害が起こり得ることを意識する
- ・ 学んだことを教訓として行動する
- ・ 判断力をつける
- ・ 一瞬一瞬を大切に生きる

### 繋がる

### 備える

最後に、本ツアーの実現にご尽力いただきました東北の皆様、大学関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

### 2014 年度被災地復興応援ボランティアツアー報告書

発行日 2015 年 3 月 1 日

発行 立正大学社会福祉学部ボランティア活動推進センター

編集 被災地復興応援ツアー報告書編集委員会

印刷 (有)ビーネット